日本の温泉の歴史と文化(四)　現代日本の温泉地の魅力と景観

多くの日本人にとって「温泉」はある種“魔法の言葉”らしい。仕事に追われ、ストレスを抱えていても、たとえば「この週末は温泉に行ける！」と思っただけで、脳にアルファ波が出てリラックスしてくるという。実際に温泉地に出かける前からそうなのである。地球に戻った日本人宇宙飛行士が「最初にしたいことは？」と聞かれ、「ゆっくり温泉に入りたい」と答えたのは有名な話だ。日本人は温泉地に出かけて何を期待し、何に癒されているのだろうか。それを示唆する調査結果がある。

日本の温泉関係者の National Center である日本温泉協会が近年まで毎年東京駅で行ってきた数千名規模のアンケート調査「最も行ってみたい温泉地ベスト 10」を選んだ回答の理由の上位は、「温泉そのもの」「温泉情緒」「自然環境」の三つだった。この三つは日本の温泉地が持つ魅力、特色の大きな三要素でもあると言えよう。

三つの理由・要素はばらばらではない。三つの重なるところに日本の温泉地に期待される「景観」が可視的(visual)に見て感じとれる。温泉好きな日本人は、出かける前からすでに温泉地の望ましいこの景観を思い浮かべて癒されるのだろう。

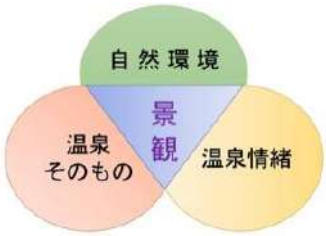

図　日本の温泉地に求める三要素と景観(石川作成)

写真　栃木県塩原温泉郷塩ノ湯(提供：石川)

三つの理由・要素のうち「温泉そのもの」は、温泉地で入浴体験する温泉の特色、持ち味への関心が高いことを示す。温泉入浴好きな日本人らしいこだわりだが、海外観光客も日本で温泉地を選ぶ際には重要な要素となる。自分の温泉志向、好みが次第にわかってくると、そうした温泉と出会える温泉地を選ぶようになってくるからだ。

連載(一)で紹介したように日本の温泉は火山性温泉が多く、泉質や泉温も多彩である。浴槽で体感できる湯の色、湯のにおい、味わい、感触(肌触り)…どれをとっても微妙に違う妙味がある。つまり五感全体で温泉そのものを味わい、楽しめるのだ。

これは、地上に湧出した温泉(これも「源泉」と言う)をできるだけ新鮮な状態で浴槽に注ぎ入れることに努める温泉旅館や温泉施設が少なくないお陰である。そのままでは熱く

て入浴できない高温泉の場合、資金力ある旅館や施設は熱交換装置を導入し、それが無理なら工夫して自然冷却するか、源泉の持ち味が薄まらない程度に少量冷却加水する。

そうした「温泉そのもの」を味わい楽しめる宿や入浴施設と出会うにはどうするか。

簡単なのは、宿泊施設・温泉入浴施設の Home Page(HP)に「源泉かけ流し(gensen-kakenagashi)」とアピールしていれば目安となる。ただ、日本語がわからない海外観光客には難しいので、HP にスペースを割いて温泉情報を丁寧に詳しく紹介している宿・施設も「温泉そのもの」へのこだわりがありそうだと期待できる。さらに日本の温泉法(1948年成立)で温泉施設に掲示を義務づけている「温泉分析書」(登録分析機関による温泉の基本データ)を HP にも掲載している宿・施設はまず間違いない。

というのは、有名観光温泉地に建ち並ぶ温泉ホテルなど大規模な宿泊施設や入浴施設は、大浴場や露天風呂など数多い浴槽を満たすだけの湯量が足りないため、浴槽に注いだ温泉を殺菌処理して再び湯口から浴槽に注ぎ直す「循環湯」方式を採用している。循環湯が普及したのは世界共通の動向である。そうした施設では温泉分析書は実際には無意味なので、HP に載せることはない。

したがって「温泉そのもの」を重視する人は、次のような所を選んで出かけていく。

(1)日本でも温泉資源がとくに豊富で湧出量も多い地方(北海道、東北、関東北部、伊豆半島、中部、山陰、九州)の温泉地で、大型温泉ホテルではない比較的老舗の温泉旅館
(2)東北地方や九州を中心に山間部に点在する伝統的な「湯治場」や「秘湯」の一軒宿
(3) 歴史ある温泉地に現在も保たれる地元住民が共同管理する「共同浴場」

写真　鹿児島県霧島温泉郷湯之谷温泉(提供：石川)

二番目の「自然環境」という理由・要素はわかりやすい。確かに今では地下千メートル以上掘削する大深度掘削が進み、日本でも大都市に温泉付ホテルやマンションが数多くで

きている。地温勾配で 100 メートル当たり平均 2〜3 度上昇するので、千メートルも掘れば、たいした成分を含まずとも日本の温泉法が定める温泉の定義の一つ「(温泉源で採取されたときの泉温が)摂氏 25 度以上」をクリアでき、施設は「温泉」を PR できる。しかし本来、温泉が地上に自然と湧出しやすい渓流脇や渓谷、河畔、火山帯の山間部など自然豊かなエリアに温泉地は集中していた。過密な都市環境に暮らす人々が緑豊かな環境に憧れ、温泉地にリフレッシュと転地効果を求めるのは理に適っていた。

日本の温泉地の自然環境にはさらに大きな魅力、特色がある。海辺に温泉地が多いことで、海を一望しながら温泉入浴を楽しめる。これはヨーロッパなら thalasso-theraphy もできる海浜保養地と温泉保養地を兼ねた二重の価値を持つことになる。

写真　静岡県熱海温泉(提供：石川)

三番目の「温泉情緒」は、日本固有というわけではない。歴史のある温泉地であれば基本的にどこでも感じられるものだ。

温泉街は、喧噪的な大都市や機能的なだけの殺風景な街並みや大規模な観光施設とは趣が異なる。行き交う人々も、日常の仕事や利害、しがらみから自由なので、表情もなごんでいる。温泉地は昔の街並みも残しており、どこか懐かしさを感じさせる。温泉街のたたずまいと街に漂う雰囲気から訪れる人を開放的な気持ちにさせる温泉情緒を生み出す。これには自然環境の良さも寄与しているが、温泉地は本来、心身の悩みを抱えた人、傷ついた人、安らぎを求める人、非日常を求める人のための平和な癒しの場所であることが根底にあると考える。

そして日本の温泉地の温泉情緒を生み出しているのは、日本でも古都や城下町など以外では少なくなった木造建築群、二層・三層の和風旅館や店舗、共同浴場が建ち並ぶ街並み

ゆえである。これも他の街にはあまり見られない石畳の通りをリラックスした浴衣姿で旅館から借りた草履や下駄を履いて散策する人々の光景、饅頭屋の店先からは温泉で蒸かした饅頭の香りに、硫黄泉の温泉地ならほのかに漂う硫化水素のにおい…。さらに別府温泉郷や長崎県小浜温泉のように温泉街のあちこちにある温泉井や湯元から噴き出す高温の温泉蒸気と湯煙。温泉資源が温泉街をもり立てて、独特な温泉情緒がが醸し出されていく。

以上の三つの要素が重なり合って、ビジュアルに温泉地の景観が形成されている。日本の温泉地の景観は、連載(三)で紹介したように温泉神社や温泉寺・薬師堂といった日本の温泉信仰の証となる歴史的建造物が、温泉地の中心となる最も古い最大の泉源(湯元)地の高台から温泉を守護するように建っていることで、さらに特色付けられている。

温泉地の核である泉源(湯元)地は広場になっていて、それを囲むように旅館や店がつくられたのが、伝統的な日本の温泉地景観である。代表的な景観は、連載(三)で紹介した石川県加賀(Kaga)温泉郷の山代温泉、山中温泉、群馬県の草津温泉の湯畑(Yu-batake)、愛媛県の道後温泉、佐賀県の武雄(Takeo)温泉など各地で見ることができる。

写真　群馬県草津温泉の自然湧出泉源「湯畑」(提供：石川)

中国やヨーロッパのように石造りの壮大な建築物による景観とはまたひと味違う、木造主体の優しさをたたえた日本の温泉地の景観と、豊かで新鮮な源泉をたたえた浴舎・浴槽の魅力をぜひ確かめていただきたい。次はそうした日本の歴史と文化を保つ名湯を紹介しよう。

本文　石川理夫